



# 希望に満ちたディストピア : 多和田葉子の震災文学 (特集 : Lyrik in Transition)

増本, 浩子

---

(Citation)

DA, 14:53-67

(Issue Date)

2019

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012207>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012207>



## 希望に満ちたディストピア —多和田葉子の震災文学—

増本浩子

### 1

東日本大震災が発生してから9年の歳月が経ち、そのあいだに震災をテーマとする数多くの文学作品が執筆された。ドイツでは特に福島原発事故に対する注目が集まったが、多和田葉子もまた原発事故に触発されて作品を創作した作家のひとりである。震災直後は人々が未曾有のカタストロフィを前に言葉を失ったかに見えるなか、<sup>1</sup>もともと多作で知られる多和田の筆が鈍ることはなかった。さまざまな詩人や作家によって比較的早い時期に発表された作品のいくつかで引用が非常に効果的に使われていると同様に、<sup>2</sup>多和田の詩「Hamlet No See」もまた、ハムレットの有名なせりふ“To be or not to be, that is the question”を下敷きにしている。<sup>3</sup>

よく知られているように、エクソフォニー（母語ではない言語による文学創作）と呼ばれる多和田の手法は、多和田にとって母語である日本語と外国語であるドイツ語の両方を異化する。それによってひとつひとつの単語が固定された意味から解放さ

---

<sup>1</sup> たとえば、当時カリフォルニア在住だった伊藤比呂美は、被災地から遠く離れた場所において何も書けず、詩を書く代わりに『方丈記』の第二段にある震災の部分で現代語訳して朗読するしかなかったことを、「料理する、詩をかく」（2012）という詩の中で述べている。<http://www.asahi.com/special/kotonoha311/itohiromi/>（2019年12月28日閲覧）参照。

<sup>2</sup> 震災直後からツイッターで発信した詩をまとめた和合亮一の『詩の礫』（2011年6月出版）は最も早く出版され、世間の注目を集めた詩集だが、その中のいくつかの詩は明らかに宮沢賢治や中原中也、峠三吉を意識している。（中原豊「3.11に向き合った詩人たち」、『原爆文学研究』第14号（2015）所収、111-112頁参照。）中原は指摘していないが、5月26日のツイッター詩「魂を返せ、夢を返せ、福島を返せ、命を返せ、故郷を返せ、草いきれを返せ、村を返せ、詩を返せ、胡桃の木を返せ」（和合亮一『詩の礫』、徳間書店、2011年、259頁）は原爆詩人峠三吉の代表作「にんげんをかえせ」（1951）を思わせる。また、川上弘美の短編小説『神様2011』（2012）は自作『神様』（1993）のリライトという形での自己引用であり、池澤夏樹のエッセイ集『春を恨んだりはしない—震災をめぐる考えたこと』（2011年9月出版）のメインタイトルは、ポーランドの詩人ヴィスワヴァ・シンボルスカ（1923-2012）の詩からの引用である。放射性物質による地球規模の汚染を扱った朽木祥のディストピア小説『海に向かう足あと』（2017）においても、シンボルスカの詩が非常に印象的に使われている。

<sup>3</sup> 多和田のハムレットへの関心は、エッセイ集『カタコトのうごごと』（青土社、1999年）に取られたエッセイ「ハムレットマシーンからハムレットへ」（155-167頁）等にも読み取ることができる。

れ、文字と音だけが残ることになる。<sup>4</sup> 多和田には珍しい日本語英語混じりの詩「Hamlet No See」では、特に言語の音声的要素が強調されている。まず、この詩のタイトルは日本人の耳には「ハムレットの詩」とも「ハムレットの死」とも聞こえる。“see”という単語はさらに“sea”を連想させもするが、実際にこの詩で問題になっているのは放射線に汚染されて死に瀕した海である。この詩では「シ」という音が何度も繰り返され、シェイクスピアの名前ですら「シ」で始まっている点が強調されて、「死」と結び付けられている。

だが、もっとも多和田らしい仕掛けは、ハムレットのせりふ“To be or not to be”が思いがけなくローマ字読みにされることにより、「生きるべきか死ぬべきか」という手垢にまみれた翻訳から解き放たれて、まったく新しい意味が生まれていることである。この詩は次のように始まる。

飛べ、飛べ、とんび、飛べ、とんび、飛び、  
飛ぶべきか、飛ばないべきか、  
To be, それとも or  
not to be:

---

<sup>4</sup> 言語の身体性／物質性に対する関心は最初期の作品にすでに顕著に表れている。ドイツ語と日本語の二言語で印刷された最初の作品集『nur da wo du bist da ist nichts / あなたのいるところだけなにもない』(1987)に取められた短編小説『絵解き』には、意味ではなく文字(の形)に対する語り手の関心を描写する、次のような印象的なくだりがある。「[...]わたしには「本」に対する異常なまでの執着があった。ここで「本」と言うのは、文学作品のことではなく、書かれる前から、製本される前から、わたしたちの頭の中にある「本」という幻想、わたしたちが夢の中で理解できないままにめぐり続ける、その「本」のことだ。その幻想が色あせ始めたのは、二年前、まだ日本にいた頃のことだった。どの本を手にとってみても内容しか見えなくなった。そんなわたしを新たにとりこにしたのは、外国の文字で書かれた本だった。わたしは都心の洋書屋に通い、読めもしないアラビア語やヒンディー語の本を何時間もめぐり続けた。日本の古典の英訳本もわたしを魅了した。読み飽きた古典が、機械の設計図のようなアルファベットの文字の中で急にまた「本」という幻想を呼び覚ましてくれたりした。わたしは死んでしまった自分の本をダンボール箱に詰め、東京郊外の公園に埋めると、仕事を引き継いでほしいというたったひとりの知人を頼りにドイツへ行く決心をした。」(Yoko Tawada: *Bilderrätsel ohne Bilder / 絵解き*. In: dies.: *Nur da wo du bist da ist nichts / あなたのいるところだけ何もない*, Tübingen: konkursbuch, 1987, S. 54/75-52/77.)つまり、語り手は母語で書かれた本からは意味しか読み取ることができなくなってしまい、そのような本を「死んで」いるものとして埋葬した後に、母語が通じない環境に身を投じた、というのである。このような言語の物質性を強調するとき、多和田は言葉を「石」にたとえることがよくある。たとえば、短編小説『ある舌の肖像』で、語り手は華氏80度と言われても暑いのか寒いかわからないが、80度という「言葉そのものはそこにある。石のように手をつかめるほど具体的に」と述べている。(Yoko Tawada: *Porträt einer Zunge*. In: Yoko Tawada: *Übersetzungen*. Tübingen: konkursbuch, 2002, S. 131.)最新詩集のタイトル『シユタイネ』(青土社、2017年)もそのような文脈で理解することができるだろう。

それは問題か、<sup>5</sup>

さらに“question”という単語は“que-stion”と二分割され、前半部は「喰え」という日本語に変身する。

喰え、と言われても、喰えない、  
それが問題、que・stion、  
フクシマのマッシュルーム、と書いてある  
喰え・たら喰ってあげたい、  
召し上がってくれよ、  
たべる な、ない、ないん、ないんだ  
喰え、喰え、クエスチョン、  
食べられるのか、  
フクシマのトマト、フクシマのキャベツ、フクシマの大根、  
です、と書いてある やおやのマジックペンで

“que”が「喰え」と読み替えられることによって、「生きるべきか死ぬべきか」という問題は放射線に汚染されたきのこや野菜が食べられるかどうか、という問題に変化する。

喰え、喰えず、クエスチョン、  
that is the question: Whether 安全か危険か  
危険だけど健康 いいえ 安全だけど病気にはなる  
調べたから安全です、数字でかく安全、目の中の血管の赤信号、ぴかっぴかっ、意識の中に in the mind 含まれた苦悩、suffer シェイクスピアが途切れ途切りに聞こえてくる、海の向こうから、汚れた海の向こうから。

ここまで読むと、多和田が実際に問題にしているのは福島産のきのこや野菜が食べられるかどうかではなく、それらを「安全」だと主張する政府の見解であることがわかる。事故後も政府はメルトダウンの事実をひた隠しにし、その結果、大量の放射性物質が海に垂れ流されることになってしまった。

---

<sup>5</sup> 多和田葉子「Hamlet No See」<https://www.lyrikline.org/de/gedichte/hamlet-no-see-13807> (2019年12月28日閲覧)。この詩は多和田自身によってドイツ語にも翻訳され、同じウェブサイト上で読むことができる。

なぜ海を敵にまわすのか、死を海に垂れ流す、死ぬのは、死なないのは、死、against a sea of troubles, フクシマの To die: to sleep; No more; and by a sleep to say we end 海の言語が分からない、もう息ができないと言っているのか、それともまだ還元できると言っているのか、海と話をすることができたなら、and the thousand 千代に八千代にこれから苦しむ natural shocks 自然には還元されないショック 耳をすまして、聞き取れる言語だけでも、波の間から集めて、書き留めて、To die, to sleep 眠らないで、喰え、喰え、クエスチョン・オブ、死、死、シェイクスピア。

福島原発事故の後、日本では原爆文学が再びアクチュアリティを持つようになり、特に放射線障害をテーマにした井伏鱒二の『黒い雨』（1965）が注目を集めた。事故発生以来頻繁に使われるようになった「フクシマ」という表記の仕方も、原爆との関連でよく用いられる「ヒロシマ・ナガサキ」からの連想だろう。多和田の詩にある“To die: to sleep; No more; and by a sleep to say we end”もハムレットのせりふからの引用なのだが、原爆という文脈においては“No more Hiroshima”というスローガンと重なって読めるし、先に引用した詩句に登場する「びかっぴかっ」という表現も、広島と長崎に投下された原子爆弾の俗称である「ピカドン」を連想させる。「千代に八千代に」は、この詩においては皮肉にも「君が代」が末永く続くことではなく、放射線が永久に消え去らないこと、仮に「君が代」が末永く続くとしてもそれは常に放射線に汚染された海に囲まれた状態であることを表現していると解釈できるだろう。

最後にこの詩の抒情的主体は“to sleep”というハムレットのせりふを受けて、読者に「眠らないで」と呼びかける。すなわち、読者にしっかり目を見開いてこれからのなりゆきを注視せよと要請しているのだ。“to be”を「飛べ」と読み替えるこの詩は実際に、読者の目を覚まさせるのに十分な異化効果を發揮している。

## 2

「Hamlet No See」が「死」を強調しているのに対し、2012年に発表された短編小説『不死の島』<sup>6</sup>では逆に不死身であることがテーマとなっている。多和田のエッセイによると、この作品を書いたのは2011年の夏で、「不死」には「富士」、「不治」、「無事」という言葉が重ねられているらしい。いかにも多和田らしい連想である。

ゲイシャ・フジヤマのフジは「富士」だけれど、太平洋の隅っこで大陸に身を寄せる美しい列島が「不治」ではなく「無事」であることを願い、できれば「不

---

<sup>6</sup> 初出は谷川俊太郎他著『それでも三月はまた』講談社、2012年。2014年に講談社から出版された作品集『献灯使』にも収録されている。

死」であってほしいとさえ思いながら書いた。ニッポンを人が住めない汚染された場所にしておもうとしている集団が存在しているような気がしてきて、むしろように腹がたった。<sup>7</sup>

近未来小説の体裁をとった『不死の島』では、福島原発事故の後、2015年にZグループと名乗る集団が政府を会社として運営し始めてから徐々に日本は国際社会で孤立するようになり、放射線による汚染を恐れて飛行機も日本へは飛ばなくなる。さらに2017年には太平洋地震が発生して首都圏は壊滅状態になったようだが、日本からの情報が途絶えているので詳細はわからない、ということになっている。

物語はアメリカ旅行からベルリンに帰ってきた「わたし」が空港で日本のパスポートを提示する場面から始まる。

パスポートを受け取ろうとして差し出した手が一瞬とまった。若い金髪の旅券調べの顔がひきつり、言葉を探しているのか、唇がかすかに震えている。[…][あれから日本へ行ってない]と言うことで我が身の潔白を証明しようとした自分が情けなかった。「日本」と聞くと2011年には同情されたものだが、2017年以降は差別されるようになった。<sup>8</sup>

ドイツで暮らす「わたし」がアメリカに出かけたのは、日本行きの航空券を密かに売っている旅行代理店があるといううわさを聞いたからだ。その代理店を見つめることができないうま空しくベルリンに帰り着いた「わたし」に日本の最新情報を提供するのには、日本に密航したポルトガル人が出版した『フェルナン・メンデス・ピントの孫の不思議な旅』という本だった。それによると、日本では高齢者たちが放射線によって死ぬ能力を奪われてしまった一方で、2011年に子どもだった世代は病気になる、働くことができないばかりか、介護が必要な状態になっているという。

冬の後にはまた春が巡ってくるように、自然の大きな循環の中では一時的に失われて

---

<sup>7</sup> 多和田葉子「『猷灯使』をめぐって」<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/40935> (2019年12月28日閲覧)。「富士」は後述する長編小説『地球にちりばめられて』でも主要登場人物のひとりTenzoが働くレストランの名称として登場し、さらに富士山に見立てられる山がヨーロッパに行くつもがあることが示唆されている。「わたしはどきどきとした。オスローに富士山があるはずがない。でも、富士山が一つしかないとは限らない。」(多和田葉子『地球にちりばめられて』講談社、2018年、164頁。)音あるいは映像の類似からくる連想によって揺さぶりをかけられることで、「フジ」という一つの言葉は凝り固まってしまった意味から解放され、自由になる。

<sup>8</sup> 多和田葉子「不死の島」、谷川俊太郎他著『それでも三月はまた』講談社、2012年所収、12-13頁。日本で実際に福島の被災者が避難先で差別を受けた(あるいは受け続けている)ことが思い起こされる。

しまったものもいつかは回復する。原子力災害の恐ろしい点は、自然が回復不可能なまでに破壊されてしまうことである。早死にする子どものモチーフは、人類の長い歴史の中で親から子へ、世代から世代へと受け継がれてきた生の連鎖が断ち切られてしまうことを意味すると言えるだろう。井伏鱒二の『黒い雨』においても、放射線障害で死に瀕するのは被爆した叔父ではなく、原爆投下後に広島市内に入って「黒い雨」を浴びた若い姪という設定になっている。実際に放射線によってより深刻な影響を受けるのが小さな子どもであることは周知のとおりである。放射線への恐怖は、次世代が死に絶えてしまうことへの恐怖でもある。

歴史上実在し、イエズス会の宣教師ルイス・フロイスとともに日本を訪問したフェルナン・メンデス・ピントは16世紀の人物で、その孫が21世紀に生きているはずはないのだが、鎖国状態になった日本に取り残された人々の暮らしが「デフォルメされた江戸時代」<sup>9</sup>のようであることを考慮に入れると、この本の著者がピントの孫を自称することの意味も自ずと理解されるだろう。この密航者が訪れた日本で流行っているのが太陽電池で動く「夢幻能ゲーム」<sup>10</sup>だとされているのも、同様の時代錯誤である。この点について松本は、「最新であるはずのゲーム機が夢幻能をコンテンツとしているという逆説。価値観の反転、というよりもむしろ既成の価値観の崩壊／消失。それを招いたのはフィクション中の放射能汚染である」<sup>11</sup>と述べている。

超高齢社会という日本の現実を「反転」させ、放射線の影響で死ねなくなった高齢者が、病弱で早死にする子どもたちを介護するというアイデアを、多和田は長編小説『献灯使』（初出は『群像』2014年8月号）でさらに発展させている。マーガレット・満谷による英語訳が2018年に全米図書賞（翻訳部門）を受賞して世界的な評価を得ることになったこのディストピア小説のタイトルは、もちろん「遣唐使」のもじりである。<sup>12</sup>

物語は大災厄の後に鎖国の道を選んだ日本で暮らす義郎という老人の視点から語られる。彼は曾孫の無名（むめい）をひとりで育てている。すでに百歳を超えた義郎が毎日ジョギングに励むほど壮健であるのに対し、15歳の無名は立って歩くことは

<sup>9</sup> 同上、21頁。

<sup>10</sup> 同上。多和田は夢幻能についても「身体・声・仮面—ハイナー・ミュラーの演劇と能の間の呼応」（『カタコトのうわごと』青土社、1999年所収、168-181頁）というエッセイを書いている。

<sup>11</sup> 松本和也「3・11をめぐる現代小説③ 多和田葉子『不死の島』に仄見える希望」、<http://m.kaji-ka.jp/daily/review/kotoba/5417>（2019年12月28日閲覧）。

<sup>12</sup> 『献灯使』とはほぼ同時期に創作された短編小説『彼岸』（初出は『早稲田文学』2014年秋号、多和田葉子『献灯使』講談社、2014年所収、201-220頁）では、故障した飛行機が再稼働したばかりの原子力発電所に墜落し、壊滅状態となった日本から人々が中国に亡命しようとする様子が描かれており、中国への移動が「遣唐使」を連想させる。また、この作品では原子力災害が起きるきっかけがもはや地震ではないことにも注意すべきだろう。

おろか、食べ物や咀嚼にすら難儀するほど脆弱である。鎖国政策のために恒常的な物不足で、東京では食料もなかなか手に入らない。そのような状況で、選ばれた子どもたちを「献灯使」として海外に派遣しようという計画が秘密裏に進展し、無名がそのひとりに選ばれる。

日本が致命的に汚染されてしまったことに対する語り手の怒りが伝わってくる『不死の島』とは異なり、『献灯使』は明るい笑いと「読んでいてなんだか元気になってくる」<sup>13</sup>力に満ちている。少年が「献灯使」として閉ざされた国から海外へ脱出するというストーリーそのものが未来への希望を感じさせるものなのだが（「灯を献ずる使者」という表現にも希望が読み取れる）、それ以上に多和田らしい言葉遊びが作品中で独特な力を発揮しているのである。再び鎖国の道を選んだ日本では外来語の使用が禁止されたため、人々はカタカナ表記の外来語を他の表現に言い換えなければならず、たとえば「ジョギング」は「駆け落ち」と言い換えられ、その理由は次のように説明される。

そのように用もないのに走ることを昔の人は「ジョギング」と呼んでいたが、外来語が消えていく中でいつからか「駆け落ち」と呼ばれるようになってきた。「駆ければ血圧が落ちる」という意味で初めは冗談で使われていた流行言葉がやがて定着したのだ。無名の世代は「駆け落ち」と恋愛の間に何か繋がりががあると思ってみたこともない。<sup>14</sup>

野崎はここに「カタカナ表記の消滅という事態と引き換えに、日本語が新たな表現と身体を見出すというプロセス」<sup>15</sup>を認めて、次のように述べている。「つまり文字や言葉のうちには、死んでもまたよみがえる力が宿っている。あるいは、意味の粋をほみ出してやろうという不埒な気配を、言葉はつねに秘めているともいえる。」<sup>16</sup>

「遣唐使」を「献灯使」と書き換え、もっぱら老人が好む活動となってしまった「ジョギング」を「駆け落ち」と翻訳することによって、これらの言葉の身体性（文字と音）が前面に押し出され、既成の意味から解き放たれて思いもよらない新しい意味を得る。野崎はそこに再生への希望を読み取っているのである。それはまた、壮健な老人の義郎が作家であるという設定に明確に表れているように、文学のもつ創造力

---

<sup>13</sup> 野崎 敏「ディストピアを悦ばしく生きる」<http://gunzo.kodansha.co.jp/27916/38718.html> (2019年12月28日閲覧)。

<sup>14</sup> 多和田 葉子『献灯使』講談社、2014年、9頁。

<sup>15</sup> 野崎 敏「ディストピアを悦ばしく生きる」<http://gunzo.kodansha.co.jp/27916/38718.html> (2019年12月28日閲覧)。

<sup>16</sup> 同上。

への信頼の表明でもある。<sup>17</sup>野崎はその秀逸な書評の中でさらに次のように述べている。

[...]無名はまったく無知であり、“無明”の闇にあるとも思える。だがそれは過去に囚われることがなく、自らを憐れんだり悲観したりする必要がないということでもある。ルサンチマンやメランコリーと無縁に、彼は日ごと、「めぐりくる度にみずみずしく楽し」い朝を享受する。声変わりはせず、男でも女でもなく、若くして白髪を戴き年齢の秩序をも攪乱する彼は、やがて海の間に身を投じ、禁を犯して「世界」へと旅立つときを待つ。

ここには確かに「まだ到着していない時代の美しさ」が、その不思議なきらめきがとらえられているのを感じる。「百年以上の信念を疑う」必要に迫られたとき、進歩や退化の観念を逸脱して、未定形な生のあり方をのびやかに描き出すことができるなら、どんなにすばらしいだろう。それを多和田葉子は、言葉の秘めた変身可能性一いにしへの遣唐使は灯を献ずる使いとして生まれ変わる一への感応力を存分に発揮することによって、あざやかに実現してみせたのである。<sup>18</sup>

吉村萬壺の『ボラード病』（2014）にせよ、朽木祥の『海に向かう足あと』（2017）にせよ、近未来の日本を舞台にした震災文学が未来に出現する社会を一義的なディストピアとして描いているのに対し、『献灯使』は「言葉の秘めた変身可能性」によって未来への希望を感じさせる稀有な小説だと言えるだろう。

### 3

続いて発表された長編小説『地球にちりばめられて』（初出は『群像』2016年12月号～2017年9月号）では、言語そのものがテーマとなっている。ヨーロッパ留学中に故郷の島国が消滅し、同じ母語を話す仲間を失ってしまったHirukoは、スウェーデン、ノルウェー、デンマークを転々とし、それらの国々で使われている言語を混ぜ合わせて工言言語「パンスカ」を作り出す。

この言語はスカンジナビアならどの国に行っても通じる人工語で、自分では密か

---

<sup>17</sup>松本は『不死の鳥』にも同様の希望を読み取っている。[...]「不死の鳥」に託された希望を探るならば、「フェルナン・メンデス・ピントの孫の不思議な旅」にしても「夢幻能ゲーム」にしても、言葉-物語がフィクション中においてもなお、国境を越え、放射能汚染をかいくぐり、力をもっているということに尽きる。」松本和也「3・11をめぐる現代小説③ 多和田葉子『不死の鳥』に仄見える希望」<http://m.kaji-ka.jp/daily/review/kotoba/5417>（2019年12月28日閲覧）。

<sup>18</sup>野崎 敏「ディストピアを悦ばしく生きる」<http://gunzo.kodansha.co.jp/27916/38718.html>（2019年12月28日閲覧）。

に「パンスカ」と呼んでいる。「汎」という意味の「パン」に「スカンジナビア」の「スカ」を付けた。[...] 昔の移民は、一つの国を目指してきて、その国に死ぬまで留まることが多かったので、そこで話されている言葉を覚えればよかった。しかし、わたしたちはいつまでも移動し続ける。だから、通り過ぎる風景がすべて混ざり合った風のような言葉を話す。<sup>19</sup>

Hiruko はテレビに出演したことがきっかけで言語学を専攻するクヌートというデンマーク人青年と出会う。ふたりは Hiruko と同じ母語を話す人を探す旅に出かけ、同郷人とおぼしき Susanoo に出会う。

Hiruko や Susanoo という名前が『古事記』を連想させ、<sup>20</sup> さらに Hiruko 自身が新潟県の出身だと言っているの、消滅してしまった島国というのは間違いなく日本ののだが、作品中では「日本」という国名は登場せず、<sup>21</sup> 消滅の理由もはっきりとは語

---

<sup>19</sup> 多和田葉子『地球にちりばめられて』講談社、2014年、37-38頁。

<sup>20</sup> 多和田自身は郷原佳佳によるインタビューの中で、蛭子、須佐之男（あるいは素戔鳴）という表記ではなく、ラテン文字を使うことによって、これらの名前を『古事記』という文脈から切り離すことを狙ったと述べている。「断片的にしか残っていないので出所がよく分からなくなってしまった神話みたいな感じにしたかったんですね。万葉仮名で書いたら、すぐに『古事記』に結び付けられてしまうかもしれませんが、アルファベットにすることで、ルーツから解放される。私の名前の葉子も、ドイツではアルファベットで Yoko と書いているわけですが、そうすると、葉っぱの葉子なのか、太平洋の洋子なのか、太陽の陽子なのか、もうわからない。それどころか日本語かどうかも確定できない。それと似ていますね。」多和田葉子「沼のなかから咲く蓮の花のように」、第2回「Hirukoは流れ続ける運命」<https://dokushojin.com/article.html?i=3319&p=3>（2019年12月28日閲覧）。とは言え、Hiruko はともかく Susanoo という名前にはインパクトがありすぎて、読者にはやはり須佐之男命以外の存在を思い浮かべることは難しいだろう。この作品ではそもそも登場人物の名前に様々な意味を読み取ることができる仕掛けになっており、まず、須佐之男命と対になるべき名前として天照大御神ではなく蛭子が使われていることについて、多和田は同じインタビューの中で次のように述べている。「全然だめな子ということで捨てられて。あの子を捨てることで御立派な日本ができたということになると、Hiruko は最初から留学する運命にあった。」また、Hiruko と行動を共にするデンマーク人青年に付けられた名前クヌートは、多和田が震災前に発表した長編小説『雪の練習生』（初出は『新潮』2010年10月号～12月号）に登場する北極熊の名前であり、もともとはベルリン動物園で生まれ、人気を博した北極熊の名前でもある。さらに、Hiruko が同国人と思ひ込んで会いに行く Tenzo（典座）の本名ナヌークは、エスキモー（多和田はこの名称を意識的に使っている）の言葉で北極熊を意味する。クヌートとナヌークは北極熊を仲介してつながっているわけだが、インタビュアーの郷原佳佳はさらに、グリーンランドからデンマークに出てきたナヌークはクヌートの母親から経済的支援を受けており、その意味でもクヌートの「偽の兄弟」であることを指摘している。多和田葉子「沼のなかから咲く蓮の花のように」、第3回「ちりばめられるさまざまなイメージ」<https://dokushojin.com/article.html?i=3319&p=4>（2019年12月28日閲覧）。

<sup>21</sup> 作品中では Hiruko の故郷は「鯨の国」などと呼ばれている（多和田葉子『地球にちりばめられて』講談社、2014年、100頁）。トリアーのローマ浴場遺跡に落ちる水滴が「ジャパン」と音

られていない。だが、『不死の鳥』、『献灯使』と読み継いできた読者は、島国消滅の原因としてやはり原子力災害を思い浮かべざるを得ない。<sup>22</sup> 福井出身の Susanoo が郷里にある「長い間忘れられていた発電所が再稼働されることになった」<sup>23</sup> 事情を語っている、なおさらである。

非常に興味深いのは、インタビュアーの郷原佳以がこの作品は言語をめぐる物語であり、『地球にちりばめられて』というタイトルどおりに作品中にさまざまな言語がちりばめられていることから、バベルの塔の神話を連想したと語ったのに対し、多和田が次のように返していることである。

バベルの塔の場合は、人間たちが神様に届くぐらい高い塔を建てようとしたわけですが、神様は、それは困るということで人間たちを混乱させるためにたくさんの言語を作った。そのせいでコミュニケーションが取れなくなって、塔を建てるプロジェクトが途中でだめになってしまったという話だったと思うのですが、私はいろんな言語があったほうが高い塔が建つんじゃないかと思うんです。たとえば英語は便利かもしれませんが、英語だけ使っていたら世界の文明は委縮し後退し廃れてしまいます。いろんな言語があることによってそれぞれの言語も活性化して豊かになっていく。<sup>24</sup>

---

を立てるのが、作品中で唯一日本を示唆する言葉である（同上、90頁）。Hirukoの同郷人のふりをしている Tenzo が初めて登場する場面なので、この擬音語にはやはり「日本」の意味が含まれていると言えるだろう。「日本」という言葉を使わなかった理由について、多和田は次のように語っている。「原発事故が起こったことによって、福島と東京の過去半世紀の違いも見えてきました。一つの「日本」というものはないんだと実感させられました。だからこの小説を書くに至って安易に「日本」という言葉を使うのはやめようと思ったわけなんです。それによって見えなくなるものがたくさんあるから。」多和田葉子「沼のなかから咲く蓮の花のように」、第2回「Hirukoは流れ続ける運命」<https://dokushojin.com/article.html?i=3319&p=3>（2019年12月28日閲覧）。

<sup>22</sup> 多和田自身もインタビューの中でこの作品が『献灯使』と対になっていることを示唆している。『献灯使』は日常生活を共同体の内側から描いていて、その共同体は外部、たとえば外国からはほとんど見えないことになっている。今度の作品では、Hirukoはたまたま留学していたので、外部にとどまることになり、「日本」で何が起こったのかはとりあえず見えない。そういう意味では二つの作品は対になっているかもしれません。」多和田葉子「沼のなかから咲く蓮の花のように」、第2回「Hirukoは流れ続ける運命」<https://dokushojin.com/article.html?i=3319&p=3>（2019年12月28日閲覧）。

<sup>23</sup> 多和田葉子『地球にちりばめられて』講談社、2014年、229頁。

<sup>24</sup> 多和田葉子「沼のなかから咲く蓮の花のように」、第1回「多言語の小説を書いてみたかった」<https://dokushojin.com/article.html?i=3319>（2019年12月28日閲覧）。多和田は『地球にちりばめられて』に先立ち、戯曲『動物たちのバベル』（初出は『すばる』2013年8月号、多和田葉子『献灯使』講談社、2014年所収、201-220頁）ですでにバベルの塔のモチーフを扱っている。

円堂はバベルの塔の神話を「言葉をめぐるディストピア・イメージの源泉のひとつ」<sup>25</sup> ととらえ、「人類のディスコミュニケーションの始まりを語ったこの神話は、世界に戦争なる現象が発生した遠因を説明するものにもなっている」<sup>26</sup> と指摘しているが、多和田はここでも価値を「反転」させ、多言語の存在をポジティブにとらえている。同じインタビューの中で多和田は、多言語の小説を書いてみたいという動機でこの小説を書いたと述べており、その際多言語とはただ単にさまざまな言語を混ぜて書くことではなく、さまざまな言語の存在を感じられるような日本語を書くことだと語っている点にも注意する必要があるだろう。

それから一つの言語の中にも、もともといるんな言語が含まれているんじゃないかと思うんです。[...] 日本語の内部に多様性がまずあって、それがさらなる言語と出会うことで、ますます多様になっていく。<sup>27</sup>

これは一つの言語の中に他の多くの言語の響きを感じ取る「オムニフォン」という概念にも通じる発想である。フランス領マルティニーク島の作家パトリック・シャモワゾーが提唱したこの概念を紹介した管は、カリブ海の島々でクレオール言語を媒体として文学作品を創作する作家たちについて論じた著書の中で、同じくマルティニークの作家であるエドゥアール・グリッサンの言葉をなぞりながら「世界の多様性は、世界のすべての言語を必要とする」<sup>28</sup> と述べた上で、クレオール作家たちは一つの言語で語るとき、「世界のすべての言語がかたわらでたたずんでいるのを意識」<sup>29</sup> していることを強調する。管によると「オムニフォン」とは、そのようにして「あらゆる言葉が同時に響きわたる言語空間で生きる」ことであり、またそのように生きることへの「決意」でもある。<sup>30</sup>

日本語はそもそもその内部に多様性をはらんでいるという多和田の認識は、＜純粋な日本語＞という虚像に対抗する。そのため『地球にちりばめられて』においても、

---

<sup>25</sup> 円堂都司昭『ディストピア・フィクション論—悪夢の現実と対峙する想像力』作品社、2019年、379頁。

<sup>26</sup> 同上、380頁。

<sup>27</sup> 多和田葉子「沼のなかから咲く蓮の花のように」、第1回「多言語の小説を書いてみたかった」<https://dokushojin.com/article.html?i=3319> (2019年12月28日閲覧)。

<sup>28</sup> 管啓次郎『オムニフォン—＜世界の響き＞の詩学』岩波書店、2005年、30頁。

<sup>29</sup> 同上。

<sup>30</sup> 同上。管は「オムニフォン」について、次のようにも定義している。「オムニフォン（「すべての言語で話す」という意味の形容詞）とは、すなわちどのような一言語をとってもそこにはつねにすでに他の多くの言語が響きわたっているという意識のことだ。」管啓次郎『本は読めないものだから心配するな』左右社、2009年、89頁。

Tenzo という名の日本人になりすましていたナスрукが実は日本語母語話者ではないと知ったとき、Hiruko は自分の中にあったネイティブ信仰を反省し、「むしろ、ネイティブ・スピーカーという考え方が幼稚だった」<sup>31</sup> と思うのである。

Hiruko はナスрукが（外国語としての）日本語を話すのを聞いて「ネイティブは日常、非ネイティブはユートピア」<sup>32</sup> と言うのだが、このせりふについて多和田は次のように語っている。

ネイティブと話すというのもいいんですけども、そればかりだと内輪だけの、本当に議論していることにならないような言葉の交換になってしまう危険がある。ネイティブでない人が、その言語を外から使うことで、問題の核心が外から射す光に照らされて明らかになることがあると思うんです。風通しが良くなって、隠していたものが見えてきて、ごまかすために言語を使っていた部分がごまかせなくなる。またはっきりしなかった部分をはっきりさせなければならなくなる。それから言葉のないものをどうにか伝えるために、独自の発想でイメージを与えなければならないという、新しい言葉を生み出す努力というのかな、そういういろんな動きが起こってくる。それを、パンスカ的に単純化して「ユートピア」と呼んでしまいましたが、実際、外国語を話すことは、こうあったらいいんじゃないかなと思える社会、つまりユートピアを思い浮かべる能力を育てるんじゃないかな、と思うこともあります。<sup>33</sup>

外国語を話すということは一種の自己翻訳でもあるのだが、ここで多和田が「問題の核心が外から射す光に照らされて明らかになる」という表現を使うとき、意識しているのはおそらく、「翻訳者の課題」(*Die Aufgabe des Übersetzers*, 1917) でベンヤミンが導入した「純粹言語」(*die reine Sprache*) の概念だろう。多和田はパウル・ツェランの詩の日本語訳をめぐるエッセイの中で、ベンヤミンを引用しながら次のように述べているからである。

ツェランの言葉が門のようだと思ったときに、ベンヤミンが「言葉に忠実な翻訳」をアーケードと比較していたことを思い出した。本当の翻訳というものは、光を通すもので、原文を隠したり、原文に当たる光を遮ったりするのではなく、言葉自身の媒介によってより強く、原書に純粹言語を投げかけると言うのであ

---

<sup>31</sup> 多和田葉子『地球にちりばめられて』講談社、2018年、209頁。

<sup>32</sup> 同上、220頁。

<sup>33</sup> 多和田葉子「沼のなかから咲く蓮の花のように」、第1回「多言語の小説を書いてみたかった」、<https://dokushojin.com/article.html?i=3319> (2019年12月28日閲覧)。

る。<sup>34</sup>

ベンヤミン自身は「純粹言語」の概念について、バベルの塔以前の言語を念頭に置きながら次のように説明している。

むしろ諸言語の歴史を超えた親和関係は次の点にある。すなわち諸言語が一つの全体をなしていると考えれば、どの言語においても一つのこと、しかも同じことが言われているという点である。むしろこれには個別の言語は到達できない。到達できるのは純粹言語、相互に補完しあう諸種の志向の総体なのである。<sup>35</sup>

この文章について、三ツ木は次のように解説している。「このように言語が「意味されるもの」に向けて相互に補完しようという考えは、実は人類が現在使用し、また過去に用いた言語のいずれもが、不完全な言語、いまだ補完されずにいる言語に過ぎないという考えに通じている。ベンヤミンの「課題」にとっては古典ギリシア語にせよ、聖書の言葉であるヘブライ語、あるいはラテン語、これらいずれの言語も近代語と同じに、いまだ補完されていない言語でしかない。古代語も、近代語も等しく、いまだ十全な形で展開されたことのない「意味されるもの」へ向けて「収束」する関係にあり、この関係を表現できるのは翻訳だけなのである。」<sup>36</sup>

「純粹言語」は具体的な言語として出現するようなものではないから、Hiruko が考案した「パンスカ」はもちろん「純粹言語」そのものではない。Hiruko 自身も「パンスカ」が不完全な言語であることを強調している。<sup>37</sup>しかし、「パンスカ」はスカ

---

<sup>34</sup> 多和田葉子「翻訳者の門一ツェランが日本語を読む時」、多和田葉子『カタコトのうわごと』青土社、1999年所収、147頁。ベンヤミンの原文は以下のとおり。「真の翻訳とは、訳文を透けて輝き出るものであり、原作を覆い隠すこともなく、原作の光を遮るものでもない。そうではなく、翻訳という固有の触媒によって強められた分だけ、いよいよ豊かに純粹言語の影を原作の上に落としかける。これは、とりわけシンタクスを移すという形での逐語性によって可能となる。語が、文でなく語こそが、翻訳者の仕事の原要素であることが示される。文は原作の言語の前に築かれた城壁だが、逐語性とはこの城壁にそって作られるアーケードのことなのだ。」Walter Benjamin: *Die Aufgabe des Übersetzers*. In: ders.: *Gesammelte Schriften*. Unter Mitwirkung von Theodor W. Adorno und Gershom Scholem, herausgegeben von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1991, Bd. IV-1, S. 18. 翻訳は三ツ木道夫「翻訳者の課題」、三ツ木道夫（編訳）『思想としての翻訳』白水社、2008年所収、202頁による。

<sup>35</sup> Walter Benjamin: *Die Aufgabe des Übersetzers*. In: ders.: a. a. O., S. 13. 翻訳は三ツ木道夫「翻訳者の課題」、前掲書、194頁による。

<sup>36</sup> 三ツ木道夫「W. ベンヤミンの翻訳思想—「純粹言語」と翻訳—」、日本通訳翻訳学会編『通訳翻訳研究』9、2009年、188頁。

<sup>37</sup> クヌートが「スカンジナビア全域でコミュニケーションに使える言語を一人で完成した。すごいよ。」と感心してみせると、Hiruko は「完成していない。今の私の状況そのものが言語になっ

ンジナビア諸言語のエッセンスを抽出した言語として「純粋言語」を指向しているとは言えるだろう。さらに「パンスカ」は現実のスカンジナビア諸語とは似て非なる人工言語として、デンマーク語、ノルウェー語、スウェーデン語といった個々の言語に揺さぶりをかけ、<sup>38</sup> それと同時にそれらの言語と響き合う「オムニフォン」的な言語の在り方を示す言語でもあると言えるのではないだろうか。

円堂は多和田と古川日出男の作品に言及しつつ、そこに描かれているのは「共通言語への夢想」であり、「バベルの塔の出来事で人類が言語をめぐる負った心的外傷を癒そうとするものにも思える。それらは被災後などに求められる共同体の歌舞音楽が「絆」の同調圧力になりかねないとは異なり、多様性を前提にしたものだ」と述べている。<sup>39</sup> 「多様性を前提にした共通言語」とは、「パンスカ」が英語やフランス語のようないわゆるリング・フランカではないという理解だろうが、<sup>40</sup> それがさらにエスペラント語やコンピュータ言語のような人工言語をイメージしたものでもないことは、クヌートの次のような発言によって明らかである。

僕なんかは、つくられた言語と言えば、コンピュータ言語くらいしか思いつかなかった。それでインターアクティブなゲームの言語を理論化してみようと思ったことはあるけれど、結局これは数学の問題であって、僕の考えている言語の本質とは関係ない気がしてやめた。エスペラント語も習ったことがあるけれど続かなかった。[...]世界中で通じることを目的につくられた人工語なのに、この先生に習っていたんじゃ、クラスの仲間の間でしか通じない。そのくらいならフランス語をやった方がまだましだと思ったりした。<sup>41</sup>

「パンスカ」についてクヌートはさらに次のように言う。「パンスカは僕らにもはっきり理解できる言語ではあるが、あくまで異質さを保っている。Hirukoを北欧社会に溶け込ませて目立たなくしてしまう言語ではない。しかもどんな母語とも直接はつながっていない。パンスカを話している限り、Hirukoはどこまでも自由で、自分勝

---

ているだけ。だから一ヶ月後にはノルウェー色が薄れて、デンマーク色がもっと強くなっている可能性。」と答えている。(多和田葉子『地球にちりばめられて』講談社、2018年、19頁。)

<sup>38</sup> デンマーク語を母語とするクヌートは「初めてHirukoが話すのを聞いた時、これまでのっぺり使っていた母語が割れて、かけらが彼女の下の上できらきら光っているのが見えた」と言う。(同上、212-213頁。)

<sup>39</sup> 円堂、前掲書、381頁。

<sup>40</sup> Hirukoが英語を話せるのにわざわざ「パンスカ」を使うのは、「英語ができると強制的にアメリカに送られてしまう」からだということになっている。多和田葉子『地球にちりばめられて』講談社、2014年、11頁。

<sup>41</sup> 同上、19頁。

手でいられる。」<sup>42</sup>つまり、「パンスカ」は自然言語を基盤としながらも、誰の母語でもないからこそ、その存在に意味のある言語なのだとと言えるだろう。つまり、多和田の「母語の外へ出る旅」<sup>43</sup>は、いまや母語から母語ではない言語へと向かうのではなく、そもそも母語という概念を超えた言語理解へと向かっているのである。

---

<sup>42</sup> 同上、306 頁。

<sup>43</sup> 多和田葉子『エクソフォニー——母語の外へ出る旅』岩波書店、2003 年。